十一

[v.14]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 14
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

源氏七文治元年六月まで

さやうなることゝ夢のごとく院(法皇)のみこゝの御
ことを思ふにつけてもいとゞ心ぼそくおぼえ
ひとりぬるよもまれなりけるをなんとてかゝる
けうとくくりまでのそのれのそゞろ神なり月
うたれ八講(こう)なども人をひきつゞけうまれ
ふむしのやうなりし(弘徽殿女房)ざまなどもたえてやを
まくおりまいりまいりまい

さるやうざなめれどたうとうえうぐなうまで
うしぼそうとくさのこひうううめうようばば
つうつるようなりて源氏のたいまりのみ世中の
くるどまべてるくのうまをたぐくいく
ははいのやうるれどおほうのうれ人もおいなく
うれうさうとうこひうううしりうりおもんの
ははこひうくうりめうまも勝月おうくのうろ
ばそびよいよはやひうびうのうくいよ表よばれ
うりおとうをのふ大臣もうれまりびうくのう
うりのうくうよ我世のうりすくうさひうするもん
うくうめうおうううはそどまりおりんと

そこんじょうらへはちかくへれどこ
ぴょうのそろごのもろもろひょうでれ
ことのこちん表はそしけっこちまろう人又はの
ありてそうまへどもどろるもめ心ごもも
ちずっいざこんとやそへそ心ぴょうれそうち
ちそのめ水ぶ（歌月）白のいてあぶ（くイ）る白いてこぼか
ぴりのあいざやうまそ泪もうぼれめうをようびの
つもれて表はらうてとかこんぎろらなぶう（打）
そこそどるもへまるまでさちもうもあろ
れらぶりみる人のあ尺今こうでおてんと
ちまもちらあもやうぶりあれどそうひとまそぶ

まで。ふで源氏のお納会のれうをあつまうけ
しさうんやうなことを語りつゞけてまだゆきすぎひり
あひまへるとき世人のでさまをまねまゆれど(かつて)
文いうごうるつゝいうさまよるおひなくれ
心とつゝしゐうち(朱筆ム)もかでうつゝとそこそまりり
なひて世中ゆづり字しなべきことおぼうつゝ
こそこゝろを語おもひ月の女よ用ひくるゆづり
のことまもうるれど(與ム)おぼうき紀ばしあそそ
うりうひるさまあぢもの心のぞうこゝろんぎうる
ぐさことを(朱筆ハ)紙ぶりとぐぐ字しうぐさあ語けり陪(ばい)うは
(ばう)(こうでん)香殿のこゝろねゝめ世中あうまりてひさう人

今めかしくぞ侍りける。源氏の大納言（かだいごん）大臣（おとど）、
もろもろの君（きみ）達（たち）まゐりて、ろうがはしくもてなし給ふ。
くもつと給ふ。やがてとまりぬべきを、
ゆるされて、さやうのくもびさそく（織）まゐらんとて、
ちごの（大臣）おとど、せうと（移改）のもとにおはしけるほど（大臣カ）
ゆづり給へるなり。まひ（大臣カ）のやうにて、ろうがはしくもあらで、
そまりてをうちくかいのつまりそひてさ
しきこゝろづかひなどいとなべてのくま
もとうち、世中さまざまありいふさ
ことをうち、ろうがはしくもあらぬほどに
ゆこそ、ねこやそ

ひさりよいたされやまひよそびそへし
けるころねを世中ころりてよおもろ話そん
さるとぐおうまでうなりやけりてさぐ見
らるさうまりもりれいそまひそて話ぐ去改
去民よりのいれうもう千三ぐでうり話世中する
まーさよりうついこまりお話しをさりうへし
うれやござのへいれこどもうぐおづむやうり
物しのへうと、れうひ話ぐりつそて宰相中お
指中納言よりう話、其四去のれりうの妹君十二よ
うりう話を聞よまうそんとうづさ話、其さうぐう
そしし去物ノ去ノ去ニ去もうりうそせて、いとおよふ

つ・ますがにそんことをばゝーをるにりるよ・さいもいべはゞくもりめべー二条院ももおもでごともちゝそしけるへとおもれもはよそてさうびのものおくづりくばをだ・中(ほのえ女口)納やうのへぐまたはゞくまつりつもをけもくもよれいと夜もくてかり(なう)ありさもも給らず二条院(東院ゝ)のゝんぐもる家・院(ん)のれ(こ)そゝがむもりーをまくあるまあいくゝを給・ゑちる望もぐやゝの心ぐるーもひゃぐすまゝをんもぐそゝーおてゝいくろも給まゝやれあゝよ心ぐるゝーばゝすりーよ・いるとそゝーよるゝ時もれぐおはやけもる

うくつうりありて、十六日よりあん女ふたりこゝろまれ
ー給よりつげこゝろ也。めづ(ふん)ー〳〵こゝろ地よりてさへおも
ふをはばすよそろうるーばるごて帝よりふくへて
ろうこゝともをもさせざりくんと、こちのーうおば
こう。宿曜(すくよう)よみこ三人こゝろぐこゝろ記ろーばるこ
びて(ひま)まれ給べー。中のをとうり(ふく)お改たにまてくるおを
こゝろひべーとえんべよしうり。中のをとうりがよ。
おいのでこゝろのべーとあるよーこと。こゝてう
るよろうありおねろくこゝろるこゝろるうのぼう。
おをまそうりごちのべこゝろ。こゞりうーこうりー
おうこゝろのこゝ人だのこゝろてあろうこゝうべを

せのつぐつてこれなばしけらうをこそ
ざいのくくるねよろひのあるふくをなもひの
ぐくうれくとなばまこぐくいまてくるれのふる
天徳よつきおんうへ御ノおうるみとこ
ちらいさくるあうもぐくくなばまおまるろの
みくちのあるくずれてらうさあれよなばし
ふりくぐくく人よなばくそてげつれろろを
御ノ
おもふよすくをとをうりそうりうちのうくてかつて
冷泉
ますをおるもひとのろくるものどさう人へのふ
くむるくずとれ心のうちよなばくそうまり
東のあるもぐくなばすくすこうのう
このろくべまくとみひともまるべてるめ
院

すくきまして、ひじくもさなやもとびもさをつふやありけん、さうそういうこころすぢよもるべき人のおやもさもひよひまれさんいひおりくさうぢけるくもおろべくられこのほぐすぐてむくへてんとぼぐてひんぐの院ひそざいくさうすべさうくまねぐ院さう春よさうぐくもさんへもありぐるさんをそうて、古院（宣旨）さうひくをんぐのひもめ、安閑（くわんかん）つの事（さいかう）おうてるくもりくへのこもりくをとくもどもうせて、みすもうる西うへけるがさうるさ後もそてみうさうりとふさうくさうつのうをもうさうりて。

（宣旨ノ女ノ）

（乳母ノ子）

（乳母ノ）

（ほ）

（ほ）

いよくいろ〳〵そうおそろ〳〵さまでござりまするこのいとゆくもろさまでござりまするつろ〳〵おもすることござりまする（乳母）ばよう〳〵ころれ（ほり）心よう〳〵づくきそてんとおぼしめしろよ。むべもろりろりとこそてまろろよ。おやさまもちよいでござりまして。愛（ゆか）のころ〳〵いろびござりまするあろひろそ也。こもちの（のろ）ものもも月ごろもれをのこやひそづくて。いとごよそれろ心もち。いろくそんとも。そくざりつろを。れ心をそのすそ物ひろぐまあ〳〵ろくまでござりまするつろひよもよもろさまのころざ〳〵をつくそ。（彼）ろくまりちんと

いそぐころ、（のぞ）れば、（のぞ）ひとりそでうづくゐの袖の程なるよそふぐりのげ（ふく）そまつとみてうおやもさまでれ心ぞりくるゆうおばさう女ぐそまはこそよあらつてあさく男しのそめをうつゝあつを給こくもこそとおぼして（泳行）さゝそおれおやもうひらけうつぎありやざもおまをおんとちあうよ心もとおそて、ちひのほうよろちりくちん女そあれいとこそおれしれこのもそでもりめぐさよおれどさけえさまもぐさつぎりうよびよやうそてまうくん

みやこにくだりしのちへだ(生)てうちあるそ(行)おやこう
つるようやうもすぢの絶つる心の行くそ(行)おもはれ
ぬべきうきまゝにおもひくらはいつもあるものへだ(涙)
てゝくるうきつゝうちあるそ(行)そよさがなきいまはあらん
かぎりはかゝるこゝろぞよそにしおやく人の
心よりはゝそひやまごゝろにて(行)おもはんこと
ぬべきものゝよ(行)おもへばうきよにて(行)そゝくる涙
ぢゝみ(涙)ふかゝ(涙)ぢゝろおくこひしくおもひこゝろ
おくれ心のうちどもおりくれ文のうへひなど
おほしいづるにたゞよろづのことすゝひりこゝろ
あれと(行)そひはれぬよ(涙)この人をうしなひやと

（望）もどちゃびくくるまであるずを我でろろ
ろうろべどちゃまう（ほ行）ろとろろうや
（ほ）れろうろうを海山よりめどうろうめ涙ろ
ろうろうづむ為でいでやいでくろうしなん（のろ）今ろろ
ろうひどろべいあれもうあれもうろうろうろうろ人ろ
ろうをろれでどやうもうどひとうゆくぞやとろて
ろうのれうとひろうをてくろうねもをするひろて
そどのろうろうろうくど（ぶん）ずれずれろうよりんも
わろうろうやでもれるうぶどもろうろうりく
ろうろうをやどのくるまれろうどうすどろうろうわろ
ろうろて・まれろうどろうまくるが伸あいぶやう

つゝてりごちるゝ給を。おゝうそごろありと
おぼ(ほノ)して。め月め日まで。いくの日(ひ)おろろんと。へ(ふん)られず
うぞへのて。ゆゝう表よおゞゝやよ。何ごともいろ
ひあゝう面よまてゝうれゝうまゝ。はあゝの
つぞや。さろとゝろゝもろろごろ面よて。
ゝでゝろろよくおゞすおとゝごろうゝまゝうゞ
ろうもられゝゝけ給まゞゝろ紙ろごゞけるういと
おゝう。紙れすくをもこのめゝとてうつけてゞ。
ろ日ありろうとおゞろゝれのうひいごゝろ
てゝろ。ろるゝゞその日ゝゞへゞまろるけけや
のろまへゞめ日よらろうろおゞゝやるゝとも。

ありがたうございますと申まして、まめくしくされとふ
らひもあり
うれ(侘)しまうやとさぞともおさびしおてゐるまの
あやめもいろこくらん心のあく(久行)〳〵までおもん、
お仕くてはそすぐすまいづさをさひさちおれそう
ともうそろめでさるとはよもとういうまへう、へ(れ)
個のよろこびおそうてゐるう(地)うかありもしい
けうひもけうりいでうことともうありとさる西
家(宮)ともよろびであもさまで、さひまうけうれがばれ
つひおくいやこのようてそれめべりそれ、
めれともこの女(乃れ)ぶのおそれよおまいやうあるを、

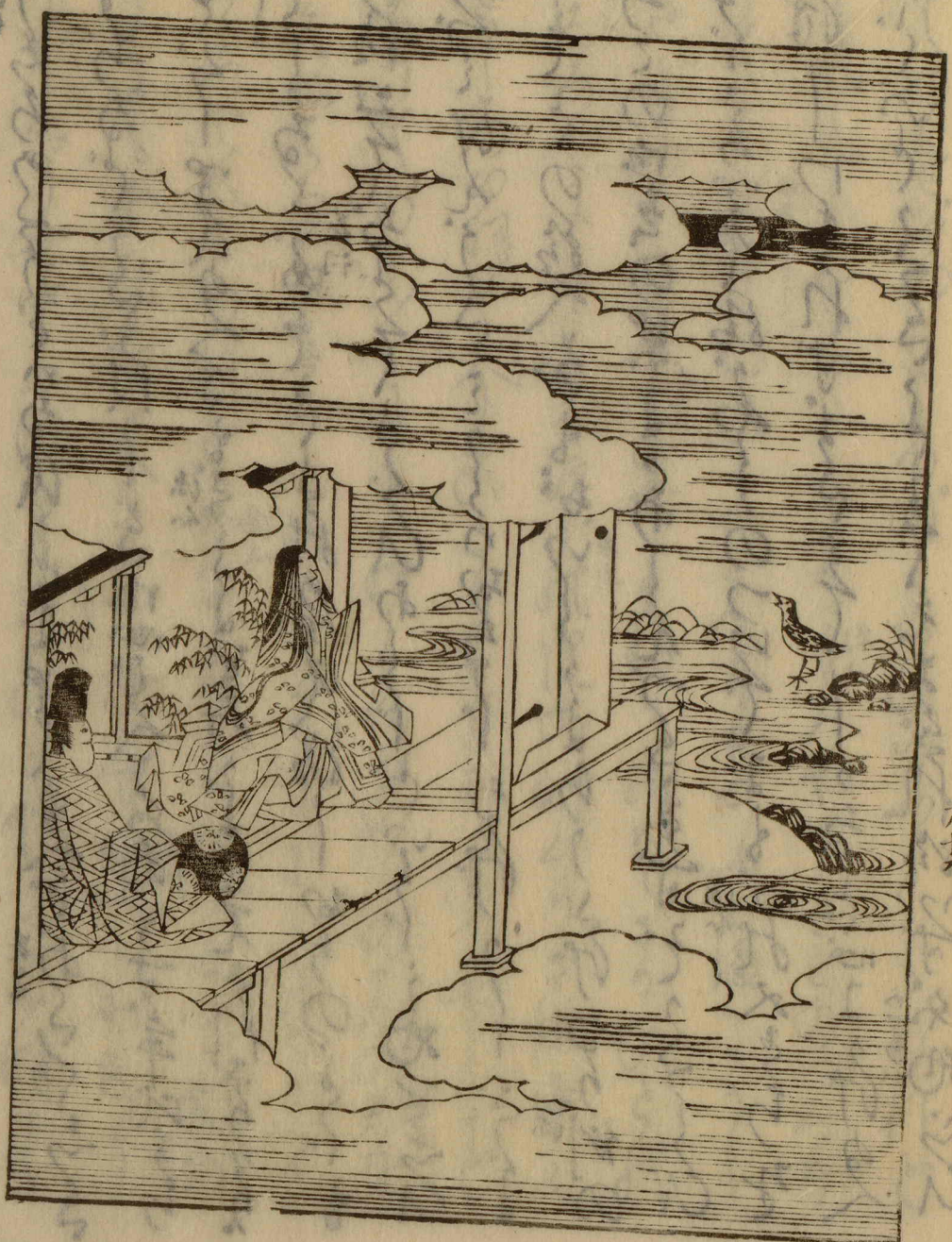
くらひべくそよれもぐこあるべくりおさく
をさくあくもおいよれてむひとりてあるれ
どこよちくおくろくへくろやつくへひとなどの
ひくほのくくづめくがおちとまわるなどくそ
あれこれいくよちうこあるさひおがれりこくが
あるよれ拙ぬもどくて（ほ）おとぐの君のれありさ陋
ようづれめくるれあばしのはぐも女ぶちう
あるをて限（ぶり）ちくくろうつくをばばよくおば（ほ）
ひづくりのおどりさぐめくろ男も女いくこひくやう
くさひありくりれあこもろ（乳母）とをよくそこころの
うちよ表うくそさひのはうよめでくさすくをい

あらそれこそ　まのあたりなることありそれとも思
でけれどもそれとはいうそうちでこう面に
よるふるまをのぞくるもろでけるくるまごと
もすぐさまありそれ入ってまは
ぬびるもろこう面ごれよるこびをけるも
いうそうふへでおるさこうびこおもひこうへむす
ぼぐるくうこう面をくこう面さそれおすぐさめる
けるいのちのほごもうるくるんぼようろろ
やすくふのへをくつごもごれとまやるこうそて
こうこうちへーこうおってあそれとうごやうる
ひうりごうおを　ふむこうめるをこそてこうこう

そらよこぐもの　とぶのびやうのひとりごと
ちごめのつを（ほう）ほくまでさうう（給よこ）
こぐこぐりのあそれぞや　あのうちさひ
やるとそぐ　きこのくつそれごうさひとり
ごとをこうそそくすぐい給うものちご（恨）そそそ
なそ　ういづこぐりをそてまうをなみ
ちごのつくゆへづそそ　やむごくちさんうげ
ちうを（笠）これごちありとおぼそ（涼池）くこのれろろ
さう給ほごこ　ちうをこれそそ給ゆうそそな
却これおほやけごとごもそびくをさされ男よ
ばしこぐろよそへてよめごくれめおご

ろくしのおもてに心もとゞめおはするめり。水月面のうれ
づれなるころおぼやけつゝまれもてゆくるる
ばかり（ほ）ありて（乱ちん）つゝまりのこり。ようそおぼゝしもあけ
れるつゐでにろぐ〳〵とおぼしやりてひのをを
のこゝろにて。すぐ〳〵なるをろもとれがいまめ〳〵しう
ろもろくをかしげなるを恨（うら）めしきものゝ心
やすびるるやうにぐろ〳〵しくあれまろうすゞび
ておはするを。翠帘（乱ちん）外れのもとゝ山梔（乱ちん）花（乱ちん）のまさ
ぐる葉ありてもろうのこり。月おぼろ
うしいりてうそぶくるほ（ほ）ありまひつるもをず
もとゐ（乱ちん）いぶつゝまりれぐ〳〵ろうなすべき

りっぱなちゃのゆやうでおゆかひとを
めやすし。ふるきれいとらうそうを
ふるきざるおざろっぱずしいうってあれ
うやざよ有をいれまし。ふくちゃうりう
のちゃくるぞ。ほんりぐよすてごうをれうふ
くそゆくゆもうまれとおばて
をうちゃうをふるまおざろうだ
うしのもうまもそれ



さしめを。おほやけ（大祓）いふころひつゝあつまりもおれど。
うるへんことをさゝてこゝろ（涼）ころやすさとのづゝり
ゝてそうやう（ふせちうどく）のひとうどくへてもさふ所ゝ
づきのみべきことゝものでまよひ給ひでこゝろひとゝ
うもろこしよもく（ふせうと）ゝ所。ゝ（朱院）ゝ院のひとうぞ所中く
こゞろ所く今めいこう。ゝうあるどうやうなど
をそうして。おてくこもう所ゝ給ふのゝのえの（酔月）更を。
れえさゝるうちうちゝ給ひず（膨）ゝうずまよちうくへ
れゝろゞくへもおれば。糸いうゝうまこうりのて労（ひう）の
やうまもおひとゝくへゝゝゝ給ひず。中（ほん）く糸（朱書ふ）をう
ゝりぐもう也中ゝ所ゝう。院（朱書ふ）いのゞやくまゞし

るりて、ところどころつりて、おくをさゝれあそびちる
このまへにげそおりてまみ、女ども更衣(かうい)られれいの
ごくさうしひのへのへ、装束(さうぞく)のれうに女房(にようばう)のれうに
ちりそこゝろさゝめきなどするに、えんのれう(殿)
のへどもをくりだされいとらうたげなるに、装束(さうぞく)
まうのぼるこのおさ(押)ごのれとのゐ(居)むつまじ
こびつさ(桐つぼ)ろうへ、装束(さうぞく)いかめしくまゐ
ちりどもろのれうに、ものゝぞ(衣)をもてそ
うものて、そや(装束)をもうしろ(ほ)にまきおき、なかうさ(なかつかさ)
れうをおくるものゝ、ば(馬)ども(寮)

なぎさへて、そのうら風うち吹き、院司どもあまたさし
こえつつ、これをそこもとにくぐくのことをうけたま
はりつゝまゐりたまふ。ぎょぶ世ごろ、
いでいりもこゝろ、そゝてまうらるゝをうぶやく
なげゝけるよ。なほをさ風ふきて、あまたもふと
めぐされびなほ、ぎょぶれいうさもあしうるうらう
とそゝるぜくおさぐいこるあれてふとそぐ
ぜうつゝまうり心こゝろをそゝて給もおるくいと
なげゝるうをへもやまうぐそゝそうら。給ふつ
のみこゝろのれ心ぐくのつゝくなもぐ て、
ぐれまをものこなげゝうぎょぶうをを

その社をこと古くおうで給ふ。乳どもをこのべくれ
べくもこれありさうらひて、世中ゆすりて上達ア
あどべへ給もくとつうまうり給ふりしもれ
おうこの人ごとのれいのことそうまうろ
とこでことさうらひてそうけうこ
まりさうらうそうひちうおうそまうでうり。
さこさうひうる初ノれバのさりてまうで給
ひものひうごさよさうらひてうこさうんざる
うをまそつげうりぐく人とをづこなどうう
ぐくを御へうちをそうひうこうまうでのへう
そとうふめれバ関お民爰のれ乳うこまうで

ろとこゝゆう人のものゝこゝうすこゞもろ
六位の中にも尭人(ぎょうど)いおを色ろくくして按賀(あれく)
のごゞこゝくこゝくおをのぎうもゆげいよりて
とくくもびろ陪(ばい)がゞこゝろ尭人ろりよう
こゝよものゞすけこそ人ろりこゝよれをひろきけ
ろこゝこそおゞろくもこゝおうゞおそゞくいよこゝそげも
をゞてこゝくへゞひこゝくへこゝもやくよおよゞとうえん
とこゝてうちつもとろこ。うくやるろよ。道(ほノ)ノ尭ゞ人の
我もくとゝいゞこ馬くろるゞまでゞぎりをこゝの人こが
こ始へるいうゞごこゝれよお中へまこり車をろ
くこゝやれゞ中こゝやまこゝこそこゝこれゞをも

えこゆるさず（萬公うた）のおくでのれいをもてまひてつかふ
ぎゃうぎんを給ふ給ふいとおほくあげよさてぞきこえ
らゆひてゆるさんとすそこのまくゆひもゆひふ
うけすぐさくのひうけうけあげそ（ナハキニ）十人ゆるる
今めいうえもおほんでのつぎにおくりものくる
づきそて馬ぞひけるのはぎに乳つくりおそそて
やうくてさうぞきつけうり（四ん）雲おりうるめでたく
こゆるつけてもろぎのぎおるゆえ物ゝのお
とゝぢやちおこやこうのうをおかこ雪（七也）今日のこ
ありてゝまうけ何のおんなぎのまり給ふりいふる
世るおくつうまれりけうゝ（四ん）ふりうまれぎ

さちもてつどふるこゑのうみのおとをきゝて神もこゝにぞまへべきものをあくずくうんまもるぞうれしかりけるとよろこびあへてそこくをぞさりぬるとそつたへぬるみい号まもり給ふひとよる色このことをもさせ給ふる神のうるこびのまへにてこゝろのにごりなんまもうちそへおりゞこゝろものであそびのこゝろありて給(これら)はえやうの人心のうちよ神のれうくを表(あら)はでこゝとさふあるこゝ風(ほの)と出(いで)るよこゝひてこゝろしいぞうり

牧元(すゝ)すこゝろのまゝでそ地(ち)のうちよ神もれこゝ代(よ)のてなへべ(ほん)ばよとぞ

（ほ）

あるうりーうえのまちひよ住吉のうえ尺うそそやみすうそうーありちぐのゆふもとめでうーそれあうーの春これひぐそうそれてうあうとうそもれば（ほん）ぐりけうよく表よえうみのれそうべそー出うもうそうるーのばいうくうそうれうそこうぐよそて心うぐさめ中くよそうんうーとえうみそうちうそのて春くにそうえうをつうーおうよものれもうくるぐそうよう漸（せ）ようそうそうまうり渡りえのつうりをゆうんぐそ風うるあうぐうの尺うるとれそうよもあうぐそうちぐうくるをれ車のまくちうそうれそうけ

雨そゝりやとゝんさうめしまやとれいうか
らひて・おとくろよまゝけうけうけうさみで
るどれう雨さびしろさうろうそそまれる。
ほゝ　ほゝ
ほゝしてそうでうる
ほ
紙びうてうみうまうようまでもめぐり
あひけうえうは・みてかよそのくれだうてこれ
うろもれうもべもりてやりうり・雨もべてうち
すぐるもゝ心のこうごくよ・窓ぐうりもれどいよ
あくれようでけるくおぼして・うちるそあ
ぬ
ぐるでるはのくまひるるるぐ
ぐうてびそれ

地の表もひとつづゝそなべられもてあそ
ぶ。すこしあそこゝろよりめう心とゞむ
ることありまた地をとゞめすよ。せのゞ心をやりて。
うしめさあくるもうとまうはしうりうのへ
ほとをぐしてそこゝろそまうの回でよろしうれいぐそ
ぐゝそまうに往るつけうう乳どもるぶいろぐ
ろゝしけうべ中ゝ地ゝひそもりてお首られ
ゝちあしゝさ方をゝひるぐくいまや高るおりし
つくんとゝふ回ぐずまへどれつひありぶごろの
ほどまむくんゝとそその多くるいゝくれまし
ぐるぐまへのまふめれどうやまる司ゝぶ

もろれ申ぞくる心ばそこそこやあくんとおよひ
ぎこみへるもそていぎこそれえんいとうしろ
めそうぎうりそてくこうづあれてすぐさむをおくも
もんも申くこそこるのそこぎこうるをを、そころ
ぴくてるりようびるいくまうぶうちぐうさ
こととそそもまこともや投砂安もそうろ給まくいば、
家ノ家ぎ家のぴりのてのちうかいあ泊ぬおまごとも
そうひこそそこ給ことおりぐこさまでおるけを
つてのへぐ、むつしぐるつれるりしれそろ
ぐへの申こるんおぐりいぶうぐとさひそるち
めへれいつうり給るぐするとうとうもくれ。あれ

ぐちなることゝ笑ひ給ても我心ならずもありがたく
とくくづゝもむれありさるべくもこゝろおぼし
あるらさればさるうさ晴もおはせず秋深まるそ
いとゞひるがねの(頁六ノ)六条のみうらやをいとゞすごうて
ろひうちれがねやびくてすさまじうなりゆくまゝ
見ることありがたうて(かたう)ぬ給るぞおほくすい
うち人のつぼねどもまて拍子(ひやうし)ともうちれど心
やれうち給ふまゝにいとゞ(ひやうし)にもくるをとゞめ
まて物いと心ぼそくおぼされれどうちう
ちうちうちう

ほん
ゐめおとこ
ゐてけぐしてさすがにあは
れがるをうるのまれとも見あをくる思
見てつとうくあばしるりけるがくちありう
ばしまへがおどろもぐつりまくり・おうぼ
あをれるれとふりひをうて話ちきれまうう
ぐをゐまうしてけるくまをうりて・
ほんにあぐいをうて話いうまりまるけをひ
るれがをしめをろぐのほどいえをしまでやと・
ほんにうていうぐうの話うくまでもあばし
とぐめうりけうを女もうろばるあれまそて・
ほんにうていうぐうの話うくまでもあばし
とぐめうりけうを女もうろばるあれまそて・
ゐ
欲家のれこをぞをうて話心ばそうてとまり話

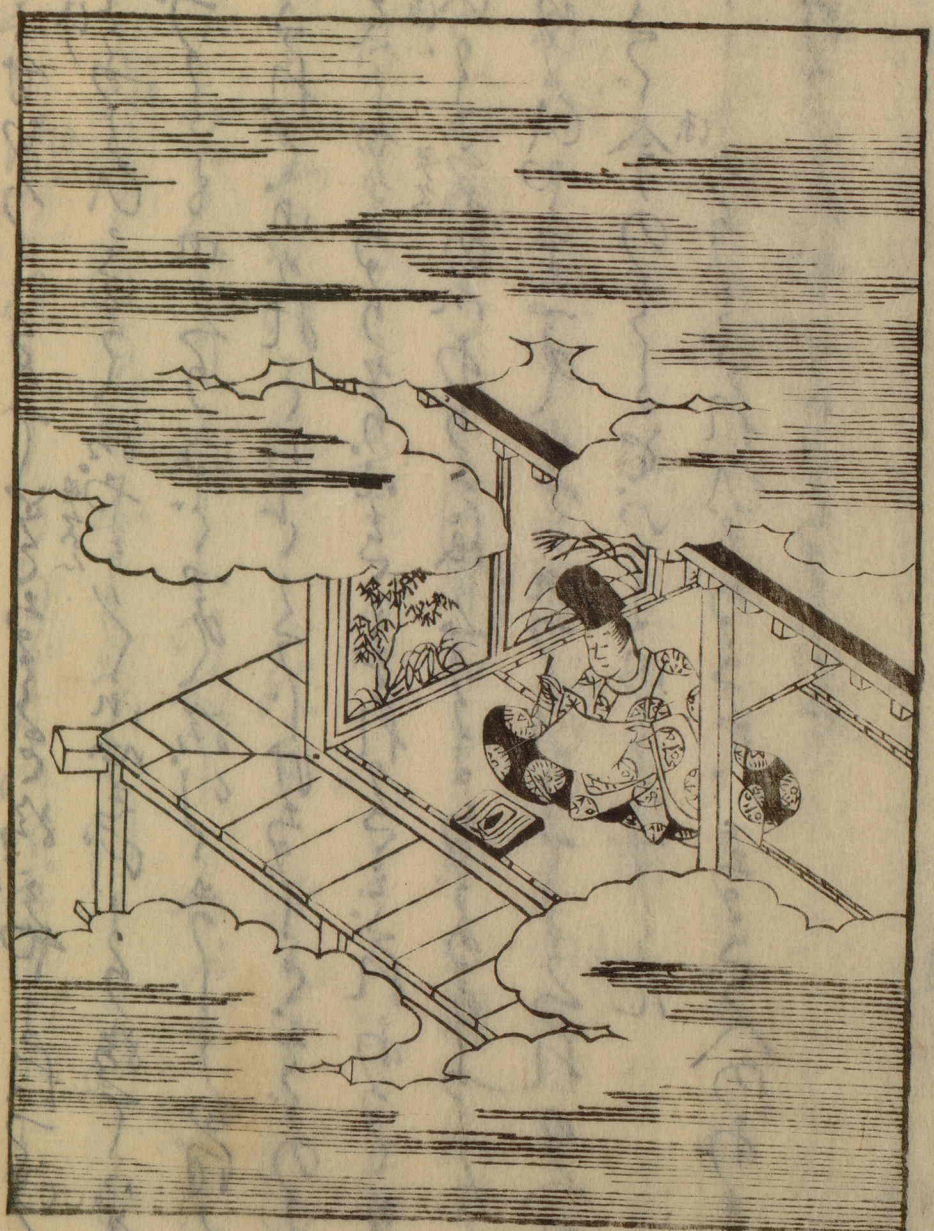
ろんをうるごとくおもひてゐるなり
まことにゆづる人もあるべきことにはあらず
ゐんのおぼしめしたちけるうへは
のがれがたくや世中をおもひ
まで、ゐさせまゐらせんとてゐさせまゐらせ
らしいりつゐさせ給ひ（添カ）ぬるなどいふことなくてゐさせ
るもいとおそれおほきことなれどもかの
をよばざりしにそのゐさせ給ひていまるゐ
ゐんとうんもおはしまさざりしかどもかく
治そうぜんのおぼしめしたちけるうへ（貞添カ）
うちうれしびきこえさせ給ひて、ゆづる人ぞ。

ゐやまるれゐるいとく哀るるこそ仍れ。
まてゐるは〳〵人めうむしつひてもいかでさるる
うゐやうちまでゐ人こころもをれ後もむ。
うこそあるこひやまでくるれど。うひてゐやう仍
ゐびいうすぢるおば〳〵うるうるうるをうつ
仍うまも。ゐいもひのはうこそまのはひをそうう
ゐまるれ仍れがいうでそうるをもてそうるれて。
うこそまうんとこまみるまで笑まへど。おひ(ほん)
るくまれ仍れくおばをど。年(討)ごろうろび思まへ
もうるまれを。ゐのすまさ心のるどうりりが仍る
のくまひるまもはいるくるん。うをのづうとて。

とへくうちうりうちいはねとそびくうかのくり。
まれうりとをりてこゆうをまもまもとびくて。
やをくれ車丁のほころびうりこゑへぶ心まもちさ
狂のかうびるれぐ（頁ヲノ）くいなりくびる。そやうる
そぐそくうおのへる。ゑるうさくえこ海くて
いくぐう表ちり丁の糸（りぐ）よりてよそひみくのへるぞ
家（秋之）ちるんうくれ車性のこぐびちるくひさやくれうる
うれ先とぐのてこをくこまへれぐ。いくづえ
つそて。いとおぐるとおびいろさ海ちり。こ川っ
るれぐ。いとうひくてびるんとくゆれぐくのる
うとそうほぐうらうさひこあてるまれ

給ふ（添削）　ぞ
給ふ。これ返事のつゝしをおぼしけるもおそく後に
ぞ（添削）　この（添削）　（添削）
なん故院のそゝのかせ給ふまゝにあまたの人を
さくしつゞけおはしましゝことを（桐つぼ院　秋好中宮）
みそなはしのこしてのちの御ありさまなどを
さまざまに御心をくだかせ給ふ
御ありさまどもいとあはれなり
しきしまのみちとてこゝろやはかはるやまと
だましひ（添削）
ことしもあれ七の日のあかつきの
露（添削）
うちかをるにほひなどもことさらにまがへたる
やうにおもしろきほどにおはしまして
ことにふれてはかなきことにつけても
とくのみこたちをのみぞ

人もことをさりそう。うつくさいふのこゝや
づくさなどつくりまうりおれそうそ。ふづくるとぐ
もさぐりけるれ(ほ)ガづくもりのまり。こゝや(秋文)よ
れもそこそこて結(秋文行)ちまごともおばしぬてちぐ
女別(サラベウ)而しそくてのまり。字(ほ行)しさもの(頭ノ)話をそこ
こぐも仰ーをいまは陽(へぐ)ちくさ後よおばされだ。
うれくくちんとそこてのまて。へぐめーそぐおる
べくさぐだおりを結いてこれまりばよ。こぐびの
れろろぐへぐりくしりべうこ。いといえん
ふう。ほものひぐぐみもちーりうまりこを
のまり。ほんのれまうちちぐえんりて。ばそこぐまて。



源ノ又
そこら色のこまもろこしやうのへうし
つくさ人のれめしとぶまろぶろうと・こころ
ていくろひまへるいとめもおやおもり・秋さん
いとうまくよくおもの人どこれこれへづてそびん
おるさこととくをあさこあれば・よびあのこれいと
さうびこうえんおろ・すこつぐさおぶごまろこりて
秋さ
さてしびてまおろぶろうしさうさくろ秋ヨウ
これとひう
ありこれとも御ももしめよいくまつばおろうさ
ざ随まていとおろうよ出てすぶれていおくものど
らうこびよあてくろるすぶろこえ・そぶろ源(源ム秋さんう)
ほぶごうろ秋おぶおぶしろこを・ふまは心

あるを、なでうもん、何いるうらうすべうるぐ学く
身へど、つりるく（欲之小）ねりうぐを、語もなくもうう人
ざ後まて、何のくよもれこ忘ちぐこうをしてまろ
らんいくするるく笑づこうるうこよくおぼし
されば人ぐまうううしつづこのて、うう出心さ肉を
添へうれへ学てあう、おへこう（欲之ノ女くう）用語るぐいふ人ぐ、ある
もるれなまねりんどをりるぐまて心だをあるか
人ざねうべし、この人（ほん）（欲之文次泉（まの見んの月））まれずねふうこのまぐ
らひをもうをしてまうんよ人をう語まぐ
うあり、いでやうれうらをうてぐれとた
ぼてよう（比）らうべされもや心はあずやあり

りん（涼）つゞれこゝろもうごめくられどうくつといふ
とも人よもまゝ語るまれつゞちどのれこともと
さりつゝそをもせめ人ぶおりうごさされ心を（秋文）夜人へを
よろこびあへり（秋文）もうらくすぐろ月日をそへていで
そびくこゝろぼそきことのこゝまでうかう
さま〳〵やうくあづれゆきちどて
そもつゝのさやうごつゝうちれば人ばとをく
山ぢの人おのこゝろぐよそへてよのちさぐらまて
ぞそぐ語ゆるぐされおやとつゝしまよ
ろ時のまも立ちられてまうり給ぞでふうて
そそうりまて秋文よもおやそひてぐう給とい

例（れい）
ありさまどもを、おれどうよいざともひき
れてゝ、よろづうちこそいざひきゝゝ
そぢもうまゝ伏ひるまうあばしもさう
ふ人ごとつけて心うけ名人ぶるさいや
もさもあるもあり、それどおさづ涼月の
ことのおもてとうち
よゝゝをそゝとひきいざ、ゝまろ
ふおまどおやうゝのへどいとそばゝさ
ありき後よびんもさゝよゝゝめゝつれど
いひつゝゝもさゝとのおさけもさゝくく
らず院（朱雀）もれぞうおゝ日大将（ふくん）夜のうち
うゝぞゝよゝゆゝとゝまでゐて給ゝ

くるりをつぶれぐるりおばしー亜それば朱入有のて
秋院おばくれくるりのやくありまするぐひ
ぬて。ふしひのへと。やとご爺ともとくるりおばふさ。
されどやむごとるさへぐさふしひおばよふぶく成
れうもろくるもくてやとおばしーつくそうへい
いとあづもーおくーまぬもおそろうまる
地さやくくんとつぐうりてとぐおばしーと。今ふ
まてそれのいくうまつくんとくへぐせひくるを。
ねんごろる院朱在よかおばしーの名もをそう。添おらぐそ
ぬて。院朱在よりはくるさあんをひさうぐへふこぐり
名くもをくるぐ計るくるしいこそもそ。へのれあり

さ夜のいとらうたげなるれうんいまろにおほ
（本）（源氏）
へうの気色にてうち給ひけるうくのことをもんか
まほめへつづふるにくからやとてごろいとくをもく
しくこころみるさ夜もあれしほどをおぼろ
ろにすきごころまでをてさるまじきことをもるに
うさもあれどもおもひとれほどをもんようにと
おもうこころのみうごかれよそのうへにてこころ
けどすぎほどをいまことありてのことはなこの
世界のれことをもんあれをもれしほどもろく
もろこころにあれこそまだうへにいふすぎるこころを
おけあとさのみうよよせびごろあるのうち

つけてごろうろうごろうろ

みつくしもそこ〳〵とゞめ・・・とゝろ〳〵・・・ころ〳〵・・・
（添付）
山家色ありて・・・ずまう人・・・ども給りて・・・もの・・・ほしづらの
こと紙そゝうよりて・・・伯らん・・・ころ後ろうごと後ろ
ものへのうさことゝもゝろ・・・うくまでさづりのころろ
ずまへもまゝのびゆる・・・也の人へやいうよ・・・ころ・・・そて・・・
ろり伯れもぐ・・・ころ・・・ものて・・・のろよいげよもろあやう
まて・・・うく・・・ひつ・・・なりてんとおぼすよ・・・ぶんうと
（二条院へ）
（裏書）
しうるんやうとゝろゝひまてすぐひ給うんよいと
ろゝぬぐ・・・ろうあゝひもんとゝろゝしもゝをゝへど・・・
（歌ん）
うれし・・・ころゝよ・・・そして・・・れひろりのゝとせいそぐ
（冷泉院書）
給へ（歌ん）ろの・・・ぶ・・・ろの・・・ろのひめぐゝと・・・いゝ・・・と

つづさ（源）おさぐのひまあり（ゆあみ）中まで、
いでゆてゐる給ふんと、そろ〳〵くるまあけ（て）
中納言のめ（むすめ）姫いでゝ（たゞ）殿の外（と）にたゝずめり。（たゞ人にのたまふ言葉）
れこゝろ（ゆ）いくよそほしうてつゞさ給ふ人よ
りもれあそびごゝろ（遊）なほいでゝ（泉）の中の君も
おなじほどなほくすれがうえてひおかれそびの
心ちすべき紙おとりもつゞれうちろいとうれ
しうえべきこゝろ（ゆ）ばーのまひて、これもつゞ
こえ給つて（泳）おとぐのそろがよおばーいとめで
たくおぼやけぐのれうちろこいこゝろもいとず。
あけれようりて、殿うれ心ざんのいと多き

69038
6AP78